薩軍兵の墓 故郷から玉名へ

元熊本高専校長 宮川さん調査

玉名市に残る西南戦争(1877年)で自決した薩軍兵士の墓石は、故郷・鹿児島県加治木地方で作られ、同郷の友人だった元兵士が荷車で運んできたものだった―。熊本高専元校長の宮川英明さん(77)=玉名市=が、独自の調査で戦史に埋もれた逸話を発掘した。宮川さんは「薩軍兵士の友情を後世に伝えている」と話している。

玉名市に残る西南戦争で自決した薩軍兵士の墓石

幼なじみ 荷車で190キロ運ぶ

墓の周辺は「加治木隊集団自決の地」と呼ばれ、玉名市立歴史博物館の調査で県内最大規模の集団自決があったとされる。宮川さんは、自決した兵士の遺骨のほとんどが遺族に引き取られた中、1基だけ残った墓石に興味を持ち、由来を調べていた。

墓石には「東楠薗利助之墓」と刻まれている。これまでの調査で、墓は薩軍加治木隊3番小隊で戦った弓場利助のもので、東楠薗は養子先の姓と判明。側面には「奉献 有村與助」とあり、有村は同隊5番小隊に所属した記録がある。

宮川さんは5月から、利助のひ孫の弓場広行さん(74)=鹿児島県姶良市=や有村の子孫らに聞き取りを開始。利助と有村は幼なじみで、終戦後に帰郷した有村が墓石を作り、荷車で玉名市に運んだと伝わっていた。

宮川英明さん

宮川さんは11月、子孫の了解を得て、墓石の一部を鹿児島県の地質に詳しい大木公彦・鹿児島大名誉教授に送り、鑑定を依頼。その結果、加治木地方で採れ、墓石などに使われた凝灰岩「桃木野石」と特徴が一致した。宮川さんは「伝承が事実である可能性が極めて高い」とみている。

墓石は高さ42・4センチ、幅21・5センチ、奥行き19・9センチ、重さ約26キロ。玉名市と姶良市加治木町は直線距離で約130キロ。宮川さんは「有村が行軍した道をたどったとすると約190キロの道のり」と推定する。墓石には「明治十二年」と刻まれており、西南戦争の2年後の1879年ごろに作られたとみられる。

玉名市文化財保護審議会の前川清一会長(73)は「薩軍兵士の墓は各地にあり、文化財指定の可能性は低い」とする一方、「伝承は素晴らしい友情物語だ」と評価する。

(隅川俊彦)

掲載日:2022/12/29 面名:県総 ページ:017 熊本日日新聞 :朝刊